



熊日NIE・新聞活用センター
Tel.096-361-3304 Fax.096-361-3035
E-mail. kumatomo@kumanichi.co.jp
Facebookページ「くまTOMO」

昨年誕生「世界で一番新しい国」南スーダン

学校行ける子 10人に4人

今年4月、アフリカの「南スーダン共和国」を取材しました。50年も戦争を続けた後、2011年7月に生まれたばかりの国で「世界で一番新しい国」といわれています。この国の子どもたちの暮らしを報告します。
(福岡支社 井上直樹)



たくさんのごみが街に捨ててあります。子どもたちがペットボトルを集めています。南スーダン



助産師の学校で話し合う
笠原さん(左はし)と南スーダンの人たち



南スーダンのもと、アフリカで最も大きい国「スーダン」の一部でしたが、民族や宗教が違う地域が戦って、二つの国に分かれました。戦いで200万人が亡くなりました。面積は日本の2倍ぐらい。人口は08年に820万人でした。その後、戦争を避けて海外にいた人が帰ってきて増えています。首都の「ジュバ」はとても暑く、気温は45度にもなります。街では小学生くらいの子どもがトラックに「モヤ、モヤ(水をください)」と叫んでいます。水道がなく、川でくんだ水をトラックが家に配っています。戦争が続いたせいで道路はきれいでなく、家には電気もありません。

近くに学校が無いなどの理由で、子どもは10人のうち4人しか学校で学べません。先生たちも長い間、勉強ができませんでした。現地で理科と算数を教える日本人の中村由輝さん(51)は「先生たちが中学生のテストを受けたら、最初は30点くらいしか取れなかった」と言います。市場では、たくさんのごみがほったらかしにされて、火や煙が出ています。子どもたちははだして、ごみからペットボトルを拾っていました。親がいなくて、ごみの中から売れるものを集めて暮らす子もいます。南スーダンでは、赤ちゃん千人のうち100人が5歳までに死んでしまいます(日本は千人のうち3人)。栄養不足のほか、治療や病気の予防が十分でないからです。

世界で活動する日本のJICA(国際協力機構)は、出産を手伝う助産師や看護師を育てる学校をつくったり、授業内容を考えたりする手伝いをしました。学校を手助けする笠原光さん(35)は「南スーダンの人たちは、国ができるまで自分たちでやろうという気持ちになかったけれど、学校に通って自分の意見を言えるようになり長くなりました」と話します。

生徒のジョナサン・アポロさん(26)は「卒業したら、故郷で少しでも人を助けたい」と夢を語りました。

日本は発電所で電気をつくるため、スーダンの石油を買っていました。しかし、そのお金が子どもたちのためでなく、戦争に使われたとの意見もあります。何げない熊本での暮らしもアフリカの子どもたちとつながっているのです。

きになるコーナーをきりとる